

まえがき

この本はフランス語を柱にして、日本語とも比較対照しながら言葉の面白さを知ってもらいたいという思いで書いた本です。ですからフランス語についての本であると同時に、フランス語を一例とした言葉についての本でもあります。

世界には数千もの言葉が存在しています。しかしどのような言葉であれ人間が使っている言葉なので、それぞれの言葉の様々な姿の底にあるものは人間共通のものだと言うことができます。ただ可能なしくみのどの範囲を使っているのか、またどのような組み合わせで使っているのか、さらにはどのしくみを重要視しているのかなどがそれぞれの言葉によって異なっているのです。さらにはそれらを形として表わす場合にもいくつかの可能性があり、どのような表わし方を採用しているのかということから、言葉の多様性というものが結果として存在しているわけです。以上のような違いから出てくるそれぞれの言葉の特徴を、それぞれの言葉の発想法というように呼びたいと思います。

この本ではフランス語の発想法を日本語の発想法とも比較しながら、言葉のしくみのありようを考えていきます。この本を読むことで、フランス語はこういう発想法を持っている言葉であり、世界には日本語とは違ってこういう特徴を持っている言葉もあるのだと知っていただきたいのです。フランス語は英語とは親類関係にありますので、語順や単語の形、文法のしくみなどに英語と似ているところもいろいろとありますが、英語にはない特徴もたくさん持っています。また一方で、表現のしくみこそ違え、日本語の発想法に近い発想法もフランス語には存在しているのです。

この本の構成について少し説明しておきます。フランス語を知らない人にも読んでいただけるように、フランス語の例には多くの場合、直訳調の英語訳を付けてあります。フランス語を知らなくても、言葉に興味があれば読んでいただけるようにフランス語の例についてもできるだけ説明を多くしてありますし、また常に日本語ではどうかということを考えながら説明をしています。各章で

もフランス語と対比しながらできるだけ日本語についても触れていますが、数章ごとに日本語ではどうなのかということと一緒に考えていただけるように、日本語の研究者である岩男考哲氏による「日本語からのふりかえり」というパートがもうけてあります。それとは別に各章の最後にやはり岩男氏により「考えよう」というタイトルで、その章で取り上げられている問題に関連して主として日本語についての課題が添えられていますので、是非挑戦してみてください。

また必要な場合には章の最後に用語の説明や、理解の助けになるようなコラム欄をもうけました。

巻末にはフランス語を知らない人には少し煩雑、あるいは難しいと思われる本文には載せなかった用例や関連事項の説明がまとめてあります。

なお、フランス語の現象については網羅的に文法規則を説明しているわけはありませんので、気になる方は随時文法書などで確認をお願いします。

さて、一言で言ってこの本は大変欲張りな本だと言えます。多少ともフランス語を知っている方々には、今まで意識していなかったかもしれないフランス語の特徴の一端を知っていただくことで、さらにフランス語の力を伸ばしていただく助けになることが期待できます。また、現在フランス語を学習中の方達には、フランス語を習得することで見えてくる世界の面白さに触れることで、これからのフランス語学習が少しでも楽しくより興味深いものになることでしょう。またフランス語をほとんど、あるいは全く知らなくても言葉に興味のある方や日本語を勉強している方々には、フランス語と比較対照することで日本語という言葉新たな視点で見直す機会になるでしょう。最後に、日本語が母語ではない読者やフランス語以外の言葉に堪能な方々は、自分の母語や他の言葉の発想法と比べることできっと新たな発見があることでしょう。

以上の様に、この本を読まれる皆さんの知識や興味のあり様でいろいろな読み方ができるようにできるだけ工夫をこらしたつもりですが、要するに言葉は面白いということを知ってもらいたいというのが著者達の願いです。

第1部の単語編では、日本語と比較しながらフランス語の単語が持っている特徴について考えていますので、こちらはフランス語を全く知らなくても英語

などと比較しながら読んでいただければと思います。ものの名前と比喻についてのところでは、日本語の現象についてもいろいろと具体例を挙げて説明しました。またあるものを呼ぶのに日常的に複数の名前があるという言葉の多層性についても触れましたが、日本語でも「工場（こうじょう）」と「工場（こうば）」、「自動車」と「くるま」のように複数の呼び名があるものがありますので、そういう例と比べながら読んでいただければと思います。

第2部の文編では、フランス語の文を組み立てる時の大きな原理である「働きかけ」と「動」という性格を中心に、それらがどのように文のしくみの中に現われているのか、また逆にその「働きかけ」や「動」を消したい時にはどうするのかという観点からいくつかのトピックについて考えました。この部分はどうしても文の例が多くなるのでフランス語を全く知らない方には少し難しいかもしれませんが、英語訳を頼りに頑張って読んでいただくとフランス語らしい発想が見えてくると思います。第2部では先ずフランス語と日本語の発想の違っている点に焦点を当てた後に、フランス語の話し言葉の発想には意外と日本語的発想に近いものがあるという流れで話を進めています。

全体を通してこの本ではフランス語の話し言葉に焦点が当たっていることが多いのですが、それは生きた言葉としてのフランス語を通してこそフランス語の発想法が見えてくると考えるからです。フロベールやブルーストといった作家達の彫琢された書き言葉の見事さ・精妙さもフランス語の大きな魅力ですが、同時に20世紀から21世紀にまたがる現代のフランス語の話し言葉に見られる躍動感もまた私を惹きつけてやみません。本書では教科書だけでは見えてこないそんな生きたフランス語の面白さを少しでも伝えようとしたつもりです。

以上のような思いを持つ私ですが、本文では伝えたいことが多くてともすれば話に熱が入りすぎ、読者の皆さんはちょっと息切れすることもあるかもしれません。そんな時は（コーヒー好きの）岩男氏の「日本語からのふりかえり」でちょっとコーヒープレイクを取ってもらおうと、また頑張って次を読もうかという気になるのではないかと思います。

それでは豊かで楽しい言葉の海に勇気をもって漕ぎ出してください。

春木 仁孝

まえがき i

第1部 単語編—フランス語の単語の様々な顔

- 第1章 フランスパンとお箸—意味の抽象性と多義性 2
コラム1 フランスパン バゲット 棒パン 13
日本語からのふりかえり① 15
- 第2章 スイーツや童話の主人公の名前—ものの名前と比喩(1) 18
コラム2 フランスのお菓子、日本のお菓子 29
- 第3章 道具と動物の名前—ものの名前と比喩(2) 31
コラム3 蛇口は羊口、芋虫は犬顔、千鳥模様は雄鶏の足模様 41
日本語からのふりかえり② 43
- 第4章 自転車はvélo? bicyclette? —一つのものに複数の名前 47
コラム4 麦の国におけるお金の話 56
- 第5章 先生はprof、警官はkeuf—省略語、逆さ言葉 57
日本語からのふりかえり③ 67
- 第6章 フランス語の語彙の学習について—言葉は生きている 70

第2部 文編—フランス語の解きほぐし方

第7章 君のことはよく分かっている—フランス語はコンパクト 78
日本語からのふりかえり④ 89

第8章 働きかけとその結果—フランス語は他動詞が好き 93
コラム5 プロトタイプ 103

第9章 自分に働きかける?—再帰構文のしくみ 105
コラム6 フランス語の受動用法と受動態 116
日本語からのふりかえり⑤ 118

第10章 事故はやってくる?—何でも動きで表わすフランス語 121
コラム7 日本語の「来る」は過去を表わせるのか?! 131

第11章 ça と on—主語は主語でも 132
日本語からのふりかえり⑥ 144

第12章 Paul-Marie は男? 女?—右に展開するフランス語 148
コラム8 フランス人の名前 157

まとめ 159

フランス語の知識を深めましょう 161

あとがき 177

第 1 部

単語編

フランス語の単語の様々な顔

フランスパンとお箸

意味の抽象性と多義性

◎—はじめに

今ではバゲットと言えば多くの人が「ああ、あの細長いフランスパンのことか」とすぐに分かると思います。フランス語ではbaguetteと書きます。この言葉を仏和辞書で引いてみると、多くの場合、先ず「細い棒」あるいは「つえ」といった意味が出ています。さらに辞書を見ていくと、もちろんフランスパンを意味する「バゲット」という訳語も出ています。つまりbaguetteという言葉は元々は「細い棒」というのがその意味なのです。最初は軍などで命令をする指揮官が持つ「指揮杖」などのことを指していましたが、そこから、妖精や魔法使いが魔法を使う時に振る「魔法のつえ」、さらにはオーケストラの指揮者が振る「指揮棒」へとその意味が拡張されていきました。それどころかbaguettesと複数形になると、われわれ東アジアの人間が食事をする時に用いる「お箸」のことも指すようになりました。このようにいくつかの異なる意味を持つ言葉を多義語と呼びます。



この章ではどうしてbaguetteというフランス語の単語が、フランスパンや魔法のつえ、あるいはお箸といった一見何の関係もないように思える異なる意味を持っているのか、つまり多義語と呼ばれる単語が持っているいくつかの意味

は互いにどのように関係し合っているのかということについて考えていきます。

また多義語の問題とも関連するのですが、比喩的に「AのようなB」というように物に名前を付ける時にフランス語では単にAと呼ぶことが多くあります。たとえば三日月の形をしているので三日月 *croissant* のようなパンと言うつもりで、フランス語では単に「三日月」*croissant* と呼びます。それをカタカナで書いたのがクロワッサンですが、もし日本語に訳すとすると「三日月パン」でしょう。つまり日本語ではAのようなBと言いたい時には普通はABという形にします。メロンに似たパンはメロンパンですね。このような名付けの方法にもフランス語と日本語では違いがありますが、それについても見ていきます。

◎—— フランス語には多義語が多い：名詞篇

最初に書きましたように、*baguette* は元々は「細い棒」という意味で、そこから指揮官が持つ指揮杖、妖精や魔法使いの魔法のつえ、オーケストラの指揮者が振る指揮棒や打楽器のばちという意味もあり、そして今では日本人にもおなじみになった細長いフランスパンのバゲットのことを指し、さらには複数形でお箸のことも指しています。これらすべての意味に共通するのは、すべて細長い棒状のものという点です。一つの言葉がいくつかの意味を持つようになるプロセスにはいろいろありますが、*baguette* の場合は形が似ている物に対して、元の領域とは別の領域で同じ言葉が用いられるようになって意味が広がっていったのです。軍の指揮杖、魔法のつえ、指揮者の指揮棒という意味の拡張においては、形だけでなく「細い棒」を振って何らかの力を行使するという働きにおいて似たものがあつたことも意味の拡張に貢献しています。同じような意味の拡張は言葉においては頻繁に起こります。比較的最近に意味が拡張された例としてウイルスという言葉があります。人間や動物の身体の中に潜んで病気やいろいろな不都合な症状を引き起こすウイルスですが、それがコンピュータのシステムに潜んでコンピュータの障害やデータ流出などの不都合を引き起こす悪意のあるソフトを意味するようになり、その意味が十分定着したのようになってウイルスに新しい意味が付け加わったわけです。

バゲットの話に戻りましょう。フランスパンのバゲットの意味はもちろん細い棒という形の類似による意味の拡張だったわけです。コラムにも書きました

考えよう

ここでは、各章の内容を基に更なる議論や考えを深めるきっかけとして、ちょっとした課題を提示していきます。すいすい読み進めるのも良いですが、ここで少し立ち止まって、頭を整理するのも良いものですよ。

これからフランス語という言語について学んでいくわけですから、その前に日本語について整理しておくとう理解も更に深まると思います。そこで以下の課題です。

これまでに聞いたことのある「日本語は○○な言語である」といった、いわゆる「日本語論」を紹介・共有してみてください（例：「日本語は主語が無い言語だ」等）。また、その「論」はどういった根拠で述べられているのかも考えてみてください。

コラム

1

フランスパン バゲット 棒パン

この章の話の中でフランスパンのことを「細い棒」と言われてちょっと違和感を覚えた人がいるのではないのでしょうか。日本のフランスパンは結構太いことが多いですね。実はフランスパンにも太さや大きさによっていくつか種類があって、それぞれの名前が伝統的に決まっています。フランスのバゲットはおおよそ250グラムで幅が5、6センチ、長さ65センチぐらいのまさに「細い棒」なのです。ところが日本でよくバゲットあるいはフランスパンとして見かけるのは、もう少し太くてフランスではバタール *bâtard* と呼ばれているタイプのパンに近いことが多いようです。

実はかつてフランスパンを日本語で「棒パン」と呼んだこともあったらしいのです。詩人の尾崎喜八（1892-1974）の文章の中に何度か「棒パン」という言葉が出てきます。

先ず揉革に包んだ切子のコップを取り出して、小壘に詰めた葡萄酒をそ

日本語からのふりかえり ①

第1章では、フランス語の単語の意味が、日本語と比べた時により抽象的であることを見てきました。そうした本文の内容をふまえて、「日本語からのふりかえり」をしていきたいと思います。ここでは主に、本文の内容と関係してきそうな日本語の現象を紹介していきたいと考えています。

なお、この「日本語からのふりかえり」は本文とは筆者が異なります。普段は主に日本語（と、コーヒー）について研究している人間が書いていますので、どうぞお付き合いください。

それでは、第1章の話題の1つでもある単語の意味について見ていきましょう。具体例とともに本文の内容を確認しておく、フランス語では「baguette」という単語が（日本語で言うところの）「指揮杖」「魔法のつえ」「指揮棒」「（パンの）バゲット」「箸」等を意味するというのでした（本文p.4の図をご参照ください）。では、日本語にこれら全てを表すことができる単語は存在するでしょうか？ ちょっと考えてみてください。

何か思い付きましたか？ 強いて挙げるとすれば「もの（物）」がそれに当たるかもしれませんね。しかし、「もの」という語は上記の「魔法のつえ」や「バゲット」等以外にも、「コーヒー」や「ケーキ」、あるいは「クッキー」や「ういろう」「わらび餅」そして「車」や「机」等、物全般を含んでしまうので、「baguette」とはややレベルが異なると思われます（例がコーヒーや甘い物に偏るのは私の個人的な好みです。ご容赦ください）。現に「baguette」が何を意味するのは、コミュニケーションの現場において混乱することはないようですが、日本語で例えば「その“もの”を取ってくれ」と言われたところで、一体何を取れば良いのか分からないでしょう。（個人的には、テーブルの上に【指揮棒】と【バゲット】が置いてある状態で、フランス語母語話者に「その“baguette”を取ってくれ」とお願いしたらどうという反応をするのか見てみたいところです。）

話を戻しましょう。上記の理由から、「もの」はちょっと抽象的過ぎると言えるでしょう。それに、おそらくフランス語にも日本語の「もの」に相当する

第 2 章

スイーツや童話の主人公の名前

ものの名前と比喻(1)

◎—はじめに

第1章ではフランス語の *baguette* や *croissant* が隠喩的な名付けであることを見ました。パンだけでなくケーキの名前などを見ても、たとえばモンブラン *Mont Blanc* はアルプスの山の名前をそのまま用いてモンブランの形に似たケーキを指す隠喩的な名前です。このようにフランス語は一般的に隠喩的な名付けを好みます。それに対してやはり日本語は「メロンパン」のような直喩的な名付けを好みます。本章ではさらに様々な例を通して両言語の名付け方の違いを見ていきます。また同時に日本語では直喩でない場合でもそれが何であるかというカテゴリーの名前、たとえばパンであれば「～パン」というような形を好むという点についても見ていきます。

◎—パン・スイーツ・お菓子の名前

それではやはりパンの名前から始めましょう。バゲットやクロワッサンを置いているパン屋さんならおそらく「エピ」というパンも置いていることが多いと思います。互い違いに麦の穂のような形をしているパンのことです。「エピ」*épi* というのはまさに麦などの穂のことで隠喩的命名になっています。日本語では「麦の穂パン」はちょっと変なので、「エピ」で定着したようです。日本語として受け入れられそうなAB型の名前が作れない場合にはバゲットやエピのようにカタカナ語(外来語)になるのが一般的と言えます。



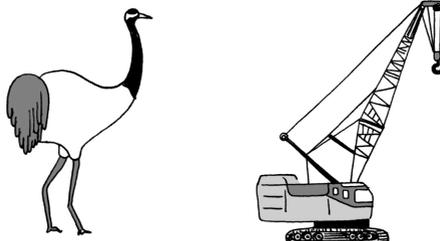
道具と動物の名前

もの名前と比喩(2)

◎— はじめに：動物から道具へ

第1章と第2章でフランス語は隠喩的命名を好み、日本語は直喩的命名を好むと説明しました。ここではその傾向を道具と動物の名前の付け方でさらに詳しく見ていくことにします。

まず建設現場でよく目にするクレーンを思い出してください。日本語話者にとってクレーンというカタカナ、あるいはクレーンという音の響きは直接あの長く伸びた起重機と結びついているのが普通でしょう。もちろん、クレーンというのは英語のcraneから来た借用語で、元の意味は「鶴」です。つまり英語ではあの長く伸びたクレーンの姿を首の長い鶴にたとえて「(首の長い) 鶴のような機械」ということで、craneと呼んでいるわけです。これは元々「細い棒」という意味であったバゲットという言葉で細長いフランスパンを呼んだ場合と同じで隠喩的命名になります。フランス語でも英語同様に鶴を表わすgrueという言葉をもままクレーンの意味で使うので、フランス語でも隠喩的命名ということになります。しかし、日本語でクレーンという言葉聞いた時に鶴を思い浮かべている人はまずいないでしょう。つまり英語から借用された日本語のクレーンは単なるレッテルに過ぎないわけで、名前と物の間には比喩的な関係はありません。



自転車はvélo? bicyclette?

一つのものに複数の名前

◎— はじめに：言葉の位相について

ここまでではフランス語の単語の意味が日本語に比べて抽象的であること、そしてその結果として多義語が多いこと、またそれと関連して物の名付けにおいて隠喩的な形式を取ることを好むことなどを見てきました。この章では、フランス語の単語のもう一つの特徴である多層性について考えたいと思います。

フランス語ではある物と呼ぶのに、複数の単語が存在している場合が非常に多いのです。それも多くの場合、日常語と文語や専門語、あるいはスラングというのではなく、日常生活において同じ物に対して二つも三つも呼び方があることが多いのがフランス語の特徴です。たとえば「本」はlivreと習いますし、もちろんこの言葉も使われますが、日常会話では多くのフランス人がbouquinと言います。こういう現象を言葉の多層性と呼んでおきます。同じ物に対して複数の単語が存在する場合、そこには何らかのニュアンスの違いがあります。書き言葉、話し言葉、若者言葉、丁寧な言葉、くだけた言葉など、このような言葉の性格の違いを専門的には「位相」（英語ではレジスター）と呼びます。フランス語に限りませんが、言葉を学習する上で重要なのはそれぞれの単語がどのような位相に属する言葉であるかをよく理解しておくことです。それでは具体的な例を通して、フランス語の語彙の多層性の実体を見ていきましょう。

◎— 言葉の多層性の実例

フランス人はサッカーや柔道も好きですが、もう一つ彼らが好きなスポーツがあります。それは自転車競技です。毎年夏になるとフランスを一周して最後はシャンゼリゼでゴールするツール・ド・フランスle Tour de Franceという自転車レースが世間を賑わせます。さて自転車をvéloと言うのはフランス語を

先生はprof、警官はkeuf

省略語、逆さ言葉

◎— はじめに

前章ではフランス語の言葉の多層性についていろいろな例を見ました。実はフランス語の言葉の多層性を作り出している原因はまだ他にもあるのです。

その一つは「省略語」対「非省略語」という図式です。前にも述べましたが、フランス語は英語のような強弱アクセントを持つ言葉ではありません。単語の中のすべての母音が同じ価値を持っているので、長い単語は発音される時間が長くなります。そのためか長めの語や表現は短く省略されることがよくあります。たとえばpublicité「広告」は日常的には短くpubと言うことが多く、adolescent「若者」もadoと省略された形をよく耳にします。そうした省略語が定着すると、元の非省略語との間で位相の違いが出てくるようになり、第4章で見たような言葉の多層性を構成することになります。

もう一つは特に都市の郊外の若者達が好んで使う逆さ言葉です。日本語でも昔から使われている「ドヤ街」のドヤは「宿」の逆さ言葉ですし、「ネタ」は「たね」の逆さ言葉です。またテレビなどで一部の芸人達が「うまい」に対して「まいう」と言ったりするのも一種の逆さ言葉です。フランス語にはこの逆さ言葉が非常にたくさんあります。たとえばfête「パーティー」は逆さ言葉ではteufとなります。この逆さ言葉も言葉の多層性に関係しています。この章ではこの二つの現象について見ていきます。

◎— 省略語が大活躍

それでは先ずよく使われる省略語の例から見ていきましょう。

「(高校、大学の) 教師」 professeur / prof (profは性の決まっていない共生名詞です)

フランス語の語彙の学習について

言葉は生きている

◎—— 生きたフランス語を学ぼう

日本のフランス語教育においては長い間日常的な単語や表現を卑俗なもの、下品なものとして軽視する傾向にありました。幸い現在では生きたフランス語を教えることが重視されるようになってきましたが、その際、言葉の多層性(第4、5章を参照)をどのように教えるかはかなり難しい問題です。véloは今では文法の教科書にも出てきますが、fricやflic、bouquinなどを載せている教科書はほとんどないのではないのでしょうか。言葉には上で述べたように日常的な言葉、あらたまった言葉といった違いだけでなく、若者言葉、女性・男性特有の言葉、地域特有の言葉、業界用語、ちょっと品の悪い言葉、かなり下品な言葉のように様々な種類があります。多層性のところで説明したように、このような違いを専門的には言葉の位相と呼んでいます。

言葉の多層性を学んで単語それぞれのニュアンスを理解し、また自分でも適切に使えるようになるためにはそれぞれの言葉がどのような位相に属しているのかを知る必要があります。しかしこれはネイティブでない者やフランスに住んでいない者にとっては非常に難しいことです。実際、フランス人の間でもその人の社会階層や職業、年代、住んでいる地域、その人のライフスタイルなどによって、同じ単語に対しての判断が微妙に違ってくこともよくありますので、言葉のニュアンスについてネイティブに尋ねる場合にも注意が必要です。いずれにしても、一つのもを表わすフランス語の複数の単語を異なる日本語の訳語で区別することは多くの場合、対応する語がないので至難の業と言っていいでしょう。訳語が違うのではなく、使われる状況が違うのです。

たとえばenfant「子供」にはよりくだけた表現がたくさんありますが、その一つであるgosseを仏和辞書で引くと「子供」という訳に加え「ちび、ガキ」

第 2 部

文編

フランス語の解きほぐし方

君のことはよく分かっている

フランス語はコンパクト

◎— はじめに

第2部では話題を単語から文レベルにまで広げて、さらにフランス語の特徴についていくつかのトピックを設定して検討していきたいと思います。例文が第1部よりも少し難しいかもしれませんが、直訳調の英訳を参考にしながら頑張っ

てついてきてください。第1部でフランス語の表現が抽象的なスキーマでいくつかの具体的な意味をまとめていることが多いという、多義性についてのお話をしました。ここでは少し視点を変えて、フランス語の代名詞や名詞を文の中で解釈する時に注意しなければならない特徴について見ていきます。その一つは、フランス語や英語の人を指す代名詞や名詞が人そのものではなくその人の考えや行動を指すことが多いという点です。日本語では「私は彼／山田さんのことをよく知っている」のように「こと」という表現がよく使われます。この「こと」というのは彼や山田さんが考えていることや、その人の性格や行動がどんな風であるかということの意味をしています。それに対してフランス語や英語では、代名詞や固有名詞そのものがその人の考えや言動を意味することが多いという特徴があるのです。

もう一つの特徴は、フランス語の抽象名詞が多くの場合、その中に動詞的な意味を含んでいるという点です。たとえば *compréhension* という名詞があった場合、単に「理解」とするのではなく対応する動詞 *comprendre* 「理解する」から「理解すること」というように動的に解釈する必要があることが多いのです。

この章ではこのようなフランス語の名詞の性格について具体的にみていくことにします。

働きかけとその結果

フランス語は他動詞が好き

◎— はじめに

英語を学習する時に5文型というのを聞いたと思いますが、その中にSVOという構文があったのを覚えているでしょうか。これは〈主語+他動詞+目的語〉といういわゆる他動詞構文のことです。実は英語やフランス語は日本語などに比べるとこの他動詞構文をとっても好む言語なのです。一方、日本語はたとえば人が関わっている事態や出来事でもまるで自然にものごとが起こったかのように表現することを好む言語なのです。

出来事ではなく状態であっても、日本語が形容詞や形容動詞を用いて状态的な表現で表わすところを、フランス語は他動詞的な構文で表わすことがよくあります。たとえば「兄弟が何人いる」とか、「お腹が空いた」とか「熱がある」といった表現をフランス語は所有動詞のhaveに当たるavoirを用いて表わします。haveやavoirは他動詞としては周辺的な動詞ではあるのですが、構文的には立派な他動詞構文です。

この章ではフランス語における他動詞構文の働きとその広がりについて見ていきます。

◎— フランス語は他動詞文が好き

日本語にももちろん他動詞を用いた構文はたくさんあるのですが、フランス語が他動詞構文を好むというのは、最初にも述べたように日本語が他動詞を用いないような場合にもフランス語は他動詞構文を多用するという意味です。たとえば次の例を見てください。

自分に働きかける？

再帰構文のしくみ

◎—はじめに

前の章ではフランス語が他動詞構文を好むことを見ました。実際、他動詞が基本形であることは、多くの場合に自動詞は他動詞をもとに作られることから分かります。日本語では「座らせる／座る」「着せる／着る」「起こす／起きる」のように、原則的には他動詞と自動詞は語尾の形で区別されます。英語の場合は、同じ形のままで他動詞および自動詞として用いられることが多いと言えます。それに対してフランス語はどのようにして他動詞から自動詞を作るかという、たとえばlever「起こす」という他動詞に再帰代名詞seを付けたse lever「起きる」という再帰構文の形が自動詞になることが多いのです。(seは母音で始まる動詞の前では母音字省略の結果s'となります。なおフランス語ではhは発音されません。)

動詞そのまま = 他動詞

lever「起こす」

coucher「寝かせる」

habiller「着せる」

amuser「楽しませる」

再帰代名詞 + 動詞 = 自動詞

se lever「起きる」

se coucher「寝る」

s'habiller「着る」

s'amuser「楽しむ」

不定詞の前にあるseは単数・複数ともに形が同じの3人称の再帰代名詞で、英語の～selfという形に相当します。フランス語では1人称と2人称は通常の代名詞と同じ形を用いてme、te、nous、vousとなります。主語と同じ人称であれば必然的に再帰構文と分かるので再帰代名詞としての特別な形は必要ないわけです。3人称だけは主語が3人称でも目的語は別の3人称の人を指している場合もあるので、3人称にはseという再帰代名詞だけの形があります。上に

事故はやってくる？

何でも動きで表わすフランス語

◎—はじめに

他動詞構文を出発点にフランス語の特徴を見てきましたが、全体的に見て日本語が「静」の言葉であるなら、フランス語は「動」の言葉であると言えるでしょう。他動詞構文に関してはこの「動」は働きかけという形で現われていましたが、この章では「移動」という形で現われる「動」について見ていきます。たとえば、フランス語の *arriver* という動詞を考えてみてください。もちろん英語の *arrive* 同様に「到着する」という意味があります。ところがフランス語の *arriver* にはもう一つ、次の例に見られる重要な意味があります。

- (1) Il est arrivé un accident de voiture ce matin.
(There happened a car accident this morning.)
「今朝自動車事故が起こった」

先ず (1) は非人称構文です。フランス語では男性単数の3人称代名詞が非人称主語として用いられます。英語ならばここは *there* 非人称にして動詞は *happen* を使うところですが、フランス語では *arriver* が同じ意味を表わします。つまり何もなかったところに「事故がやってくる」＝「事故が起こる」と考えているわけです。フランス語ではこのように元々は移動を表わす動詞が実際の移動とは異なる意味で用いられることがよくあります。人やものの移動だけでなく、広く物理的な位置変化を表わす動詞が、実際の位置変化を伴わない意味で用いられることもよくあります。対応する日本語でも同じような現象はある程度観察されますが、そのような場合はフランス語ほどは多くありません。この章では、このような動詞の意味の拡張について詳しく見ていくことにします。

第 11 章

çaとon

主語は主語でも

◎— はじめに

ここまで、フランス語では他動詞パターンを好むということ、つまり働きかけの源、エネルギーの出所としての主語が非常に重要な役割を果たすということを見てきました。この点においてもフランス語と日本語は大きく異なっています。日本語では主語の省略された文や、主語がはっきりしない文はまれではありません。一方、フランス語では働きかけのある他動詞の場合だけでなく、自動詞や性格付けの文においても、構文の上で主語の部分を空白にしておくことはできません。規範的には必ず主語の位置を埋めなければなりません。英語やフランス語で代名詞が発達している理由の一つは、このような性格と大いに関係があります。おまけに、話題になった名詞に代わる場合や目に見えている人やものを指す場合に使われる代名詞だけではなく、フランス語にはonというちょっと変わった人称代名詞や、またçaという話し言葉で非常によく使われる指示代名詞があります。

フランス語では主語は重要なのですが、実はそんなフランス語でも文の主語や働きかけの主体を背景化したり表に出さないようにしたいという場合もあるのです。特に話し言葉ではそのようなことがよくあります。そんな時に活躍するのが、このonとçaなのです。この章ではこの二つの代名詞の働きを通して、フランス語のもう一つの面について見ていくことにします。そして、これまで違いに重点をおいてお話ししてきたフランス語と日本語ですが、フランス語には意外と日本語に似ている点があって、私達日本語話者にもよく分かる一面もあるということを知っていただきたいと思います。

Paul-Marieは男? 女?

右に展開するフランス語

◎— はじめに

英語やフランス語ではどうして名字と名前の順が日本語と逆になっているのか考えたことがあるでしょうか。名前だけでなく、住所の書き方も逆ですね。これは単に文化や習慣の違いというのではなく、実はそれぞれの言葉の性格によるものなのです。フランス語では形容詞は原則として名詞の後ろに置かれます。これは先ず名詞を言って、それに形容詞を付けることでその名詞をさらに限定してその名詞が意味する範囲をせばめていくということです。関係代名詞によって導かれる関係節も名詞の後ろに付きます。関係節は形容詞節と呼ばれますが、いわば文の形をした形容詞と思えばいいでしょう。形容詞的に用いられた現在分詞や過去分詞も名詞の後ろに付きます。一方日本語では形容詞でも関係節的な内容でも名詞の前に置かれます。結局、日本語もフランス語も名前や住所でも同じことをしているわけです。

この章ではこのように限定する要素を後ろに持ってきて、いわば右に展開していくフランス語の性格に関連することを見ていくことにします。この性格は名詞の限定だけでなく、ひいては文と文の関係にまでおよんでいくことになります。

◎— 名詞の限定について

それでは先ず名詞の限定のシステムから見ていきましょう。既に述べたように、フランス語では形容詞は名詞の後ろに置かれて名詞が指す範囲を限定します。たとえば *une pomme* 「りんご」と言った段階では *pomme* 「りんご」と呼べるものならどれでも指すことができます。そこへ何か形容詞を付けてたとえば *une pomme verte* と言えばりんごの中でも「青いりんご」と指す範囲がせば

フランス語の知識を深めましょう

ここでは本文に載せきれなかった追加の用例を紹介していきます。また少し難しい例や現象にも言及しています。フランス語を学んでいる人、研究しようと思っている人は本文の用例とともに参考にしてください。なお、本文と比べると説明は多少とも簡略化しています。

第 1 章 関連

動詞や名詞の多義語をもう少し補っておきます。

動詞の例

フランス語学習の初級段階で partir と混同しがちなのが sortir という動詞です。sortir のいろいろな意味に共通の意味は「いる／ある場所から外に出る」のようなものです(レベル1)。人を主語にとると「家などから外に出る」「外出する」「遊びに行く」「(学校などについて) ~の出身である」のような意味になり、主語が人以外の場合には「(本が) 出版される」「(映画が) 封切られる」といった意味にもなります。外に出るということは姿を現わすということですから、出版や封切りにつながるわけです。

